

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

今回はアルジェリアで発生したテロ事件を受けて、テロリズムを生む大きな社会的背景やこうした問題に取り組み際の、武道における「礼」の意義について考察してみた。

世界中にいわゆる「武術」と呼ばれる技術やテクニクは多数存在するが、日本の武道ほど「礼」を重んじる「武術」も珍しい。

武道の中でも例えば弓道などは、その所作のほとんどが礼法だと言っても過言でない。武道がそれほどまでに礼を重んじるのはなぜなのだろうか？

以前に本連載で記したことがあるが、日本の武道では一般的に、鹿島・鹿取の武神を祭り、神の御前で心身を鍛練することを常とする。

私はそもそも武道における「礼」とは、日本古来の神話にその原点があると考えている。以前本欄でその鹿島の神「タケミカヅチノカミ」の

「国譲り」の話を紹介した。

これは、度重なる交渉の失敗にもかかわらず、自ら強攻策に出ることなく、物心両面にわたる誠心誠意、懇切鄭重に道義的提案をし、礼を尽くして交渉を繰り返す物語だ。

この時「タケミカヅチノカミ」は「いかに相手の尊厳を守りながら納得させるか」という点を重視し、徹頭徹尾「礼」を尽くして交渉にあたったのだ。中には交渉に応じずに戦を挑む国津神もいたが、武力を使用する際には相手を圧倒しつつも、相手をせん滅するようなことはしなかった。勝敗が付き相手が降参すれば、その尊厳を失わないように丁寧処遇した。

これによって、ついには天津神の提示した大義に国津神が帰一して「天地共に永久に栄えん」との合意に至った経緯が記してある。

その後、神武天皇は「オオクニヌシノカミ」の孫を娶っている。そし

てなにより、現代に至るまで、出雲大社をはじめ国津神を祀る神社は全国各地に存在し、信仰を集めている。勝者が敗者の尊厳や価値観を踏みにじるようなことはしなかった証左である。だから日本各地には、地方文化が失われず、土地の氏神様と共に守られてきた。

戦（いくさ）はしても決して敵対勢力をつくらない。戦を通じて敵対関係を逆に友好関係に変化させていく、というのが国譲りの物語のエッセンスでもある。

礼を尽くして交渉をし、戦った後も礼を尽くして共に国を治めたこの神話の世界が、そもそも武道における礼の淵源だったのだと思われる。

テロを生む社会的な背景を知れ

こうした考え方が、現代の政治にも有用で実効性があるということを紹介したい。

を取り戻すことを可能にした、というところに意味があった。

まっぴりだったのだが、ただ取り縮まるだけでは社会が不安定になり、こうした政府に批判的な勢力が巨大な反政府勢力に膨れ上がる危険性もあった。

もう一つ、日本で起きた大逆事件を例に考えてみる。これは明治時代に大変影響力の強かった思想家でジャーナリストの幸徳秋水を中心とするグループが明治天皇を暗殺しようとして捕まり処刑された事件である。

こうした状況で当時の明治天皇は、秋水たちのような危険分子を取り縮まって強圧的に対処しようとする政府に対して、そうではなくて貧民救済を優先させるべきである、として桂首相に「治療済世の勅語」（1911年2月11日）を出され、済生会、正式には「恩賜財団済生会」を設立させたのである。

これは「過激な無政府主義者たちが計画したテロ」と単純に断じてしまふようなものではなく、その背景には、急速な経済発展による貧富の格差があったからだ。明治政府は、富国強兵政策により著しい成果を得た反面、社会福祉対策は甚だしく立ち遅れた。それにもかかわらず、官憲による取り縮まりが強化されたことで、これに反抗する社会運動が激化した。秋水たちはそんな政府に反発し、政府の権威の源たる天皇陛下を暗殺しようと考えたのである。

つまり、天皇の命によって貧しい人の救済のための基金が設けられ、社会活動が展開されたのである。その際、当時政府がこの活動の「宣伝」効果を高めるために「恩賜財団」の大きな文字を書き添えたところ、明治天皇は「この事業は朕一人で行うのではなく、朕が国民と共に行うのであるから、『恩賜財団』の文字は改めるようにせよ」と仰せられた。桂首相が改めて参上し原案通りにしたい旨言上し「恩賜財団の文字は小さくして2段の組み文字にする」という現在まで続く表記の仕方まで決まったという。

彼らは事件を起こす前に逮捕された訳だが、彼のような考え方、政府に対する批判は、当時米国で育ったキリスト教社会主義や組合主義の影響下にあった人々の間で広く浸透していた。官憲は、こうした動きを警察を使って強圧的に取り縮

こした天皇主導の救済活動を通じて、当時の社会不安が解消されていったのだった。

先日のアルジェリアのテロ事件を例にとつて考えてみると、テロリ

を例にとつて考えてみると、テロリ

米陸軍の特殊部隊「デルタフォース」を創設した時のメンバーの一人に日系人の方がおり、その方に話を伺ったことがある。

彼はベトナム戦争時に、ゲリラ戦争に苦しめられた米軍がとったユニークな作戦について話してくれた。当時、ゲリラ側の戦力が次第に拡大して米軍の基地が取り囲まれ、陸上ルートが完全に遮断され孤立し、どうしようもなくなつて追いつめられてきた時に、彼らがとった施策の一つは、現地に製材所をつくり雇用を生み出すことだったという。

とにかく突貫で製材所をつくり労働者を募集して雇用を創出した途端にゲリラの勢力が急激に減つていったというのである。

これは雇用を生み出してお金が儲かるようにしてあげたということ以上に、現地の人々の生活や文化に合った職を創り出したことで、彼らにもととの文化と本来の生活

ストたちが事件を起こしたことに対しては、アルジェリア政府の対応のように強権を使って一時期対処するのはやむを得ないとしても、その後の処置として、より大きな社会的正義のための行動をとらなければ社会の安定は生れない。

首謀者ベルモフタールはガルディアアという国際資本の影響下にあった町で生まれ育ち、貧困の苦渋を目の当たりにしたと見られている。

こうしたテロリストたちや彼らを同情する社会風潮が生れるような貧困や格差の問題を一切無視して、武力の優越に過信して、もっと徹底的に相手を取り縮まる、というだけでは根本的な解決にはならないからである。

相手がテロ行為に至った心情や背景に対する理解を示し、こうした人たちに言えば貧民救済のために立ちあがった英雄として彼の精神を祀り、二度とそのようなことがないように、我々も最善を尽くす、というのが、日本の神話的な治め方である。

圧倒的な武力を持つているこちら側からそのような働きかけをしていけば、ベトナム戦争でゲリラが武器を置いたように根本的な変化が起きてくるはずである。

これがまさに武道でいう「礼」の考え方である。

「礼」の考え方を取り入れた邦人保護対策を打ち出せ

日本企業はある意味でグローバル経済の最先端において熾烈な戦いを展開している。現代の市場原理に基づくこの経済戦争は、必然的に一方で貧困をつくり出し、格差を生み出してしまっている。

こうした貧富の差を背景にした社会的な不満がテロを生んでいるのだとすれば、国家あるいは市場とテロリストたちの軍事的な対立の渦中に、企業は必然的に入っていることになる。

日本企業の多くはこうした経済と安全保障の関わりにあまりにも無頓着過ぎるのではないかと。

グローバル経済戦争で勝利を治めようとする日本企業は、一方で市場経済システムがつくり出す社会の不均衡に対して、富の再配分を促す活動をより積極的に行っていないかなくてはならない。

企業単独で難しい場合には、例えばODAを使ったJICAの国際協力活動をリンクさせて、富の不均衡の是正に向けた取り組みを行うような総合的な働き掛けが必要だ。

武道における「礼」の考え方を取り入れて、貧富の差を生み出してしまふ市場経済の負の側面を補う総合的な国際協力のあり方を打ち出すことこそ、真の邦人保護対策となり得るのだ。